一般的包括的な授業の悩み

芦田川 祐子

私は、中高英語のコアカリキュラムの「教科に関する専門的事項」の英語文学分野で「一般的包括的科目」に位置づけられている「英語文学Ⅰ」という科目を、文教大学文学部英米語英米文学科で担当している。この授業の実践報告をしながら自分の抱えている悩みを見直して、改善につなげたいと考えている。

カリキュラムと学生

まず授業を行っている環境を概観する。文教大学は教員養成の伝統があり、文学部といっても教職志望の学生が多く入ってくる。大学案内パンフレットやホームページでの文教大学英米語英米文学科の紹介フレーズは、「英語力を磨き、英語圏の文化を学び、国際社会で活躍する力を養う」というもので、文学を極めるという目標は掲げていない。学生は2年次から、英語教員にふさわしい英語力と指導力を伸ばす「英語教育コース」と、英語圏の言語と文化について多様な角度から理解を深める「英米文化コース」に分かれて学ぶ。ただし互いにコースをまたいだ履修が可能で、教員志望の学生も文学系の科目を履修する。1学年の定員は100名で、文学好きの学生もたまにいますが、中高英語教職課程の履修者が半分以上を占める印象だ。ペアワークやグループワークを苦手としないまじめで素直な学生が多いので、その点では授業のしにくさはない。

当学科のカリキュラムの中で、「英語文学Ⅰ」は2年次の選択必修科目である。学科には4つの専門領域があり、英語教育コースの「英語教育」と「英語学」、英米文化コースの「英米文化」と「英米文学」に分類される。各領域の3年次科目を履修するためには2年次科目を履修しておく必要があるため、領域名を冠した2年次科目は入門科目として多くの学生が履修する（「英語文学Ⅰ」は春学期開講でイギリス文学中心、「英語文学Ⅱ」は秋学期開講でアメリカ文学中心という棲み分けがある）。さらに、教職課程でも「英語文学Ⅰ」はコアカリキュラムのため必修であり、結果として教職課程履修者もそうでない学生も含め、英米語英米文学科2年生のほとんどの学生が履修することになる。加えて、2年次に取らなかった3・4年生や、少数ながら英語教員免許取得を目指す他学科生もいる。「英語文学Ⅰ」の近年の履修者は平均約100名で、コロナ下はオンデマンド授業をしたが、基本的には対面授業を行っている。ちなみに私は3年次科目の「英語文学特殊研究Ⅱ」も担当しており、それも教職課程の「教科に関する科目」の選択科目の1つだが、これについては比較のため後ほど触れたい。

シラバスと授業内容

次にシラバスの主要項目に沿って、「英語文学Ⅰ」の授業内容を説明する。サブタイトルは「英語文学入門」で、この科目は入口でまだ奥があるということを示している。授業概要は、「英米文学史の流れを中心に、カナダや豪州等も含めて英語で書かれた文学の広がり概観しながら、文章や映像で代表的作品に触れ、英語文学と文化に関する基本的知識を身につける」というように、一般的包括的である。「英語文学」が英米だけのものではないことには講義で言及するが、実際に読解に使う「代表的作品」は、イギリス文学8割、アメリカ文学2割程度で、このシンポジウムのサブタイトルである「多様性と代表性の間」の位置は、かなり代表性寄りになる。半期15回の授業で、教科書に抜粋の載っている作品や、有名作品の特徴的だと思われる部分を、時代を追ってとりあげている。

授業方法に関し、「教科書および事前に配布した紙の資料とパワーポイントや映像資料を使用した講義を中心に進められ、毎回、作品の抜粋の分析などを書く授業内提出物がある。状況により座席を指定することがある。学期末には筆記試験を行う」と記載している。到達目標は、「英語で書かれた文学の代表作および文学作品の英語表現や背景となる文化について、基本的な知識と理解を得る」ことである。英語コアカリキュラムの「英語文学」の学習内容に関わるキーワードを入れているが、教職課程履修者ばかりではないので、「英文科」の学生としての教養や、英語を話す国際人としての一般常識を身につけてほしいという思いがある。それに英語力アップや読む楽しさがついてくればなおよいが、そこは努力目標ともいえるべきものだろうか。もちろん、「代表作」とは何かという問題はあり、文学史の“canon”が固定されていないことには注意を促すべきだと考えている。

教材として、この授業では『よくわかるイギリスの文学』（清宮倫子・清宮協子編著、南雲堂、2011年）という教科書を指定して主に使用し、補足のため、そこに載っていない作品の抜粋や「アメリカ文学史（超要約版）」のプリントを作成し配布している。『よくわかるイギリスの文学』の特徴は、B5判95ページのコンパクトな中に、14章からなるイギリス文学史概説と、28課分37作品の抜粋がまとまっていることだ。「はしがき」に「作品の抜粋と解説を見開きに収め、作品を鑑賞する『ポイント』（設問）を付け、文学史的な概説は簡潔にして後に回した」（3）とあるように、順序にも工夫が見られ、「これは、まず作品に当たることにより、感動を引き

出し、知識としてのイギリス文学史から脱却しようというねらいである。したがって作品の選択は、筆者のイギリス文学史観に沿うものなので恣意的であることを免れてはいない。しかし、だからこそ全体としてまとまりをつけることが出来たと考えている」（3）という。ただし私の授業は、知識としての英語文学史からは脱却していないように思う。先に作品テキストに接してから、その時代の文学史の記述を見ていくのだが、そこで当日のポイントとなる（覚えてほしい）作家・作品名や用語を確認している。

授業の流れはほぼ毎回、最初と最後に課題を出して紙に書かせ、間に2～3の作品読解と文学史の解説を挟むパターンである。最初の課題は1つめの作品読解に関連する問題、最後の課題は授業内容を振り返って内省を促すものをと心がけている。授業外での学修（予習・復習）に関しては、「毎回、作品原文の抜粋を予習して授業に臨み、授業後には作品の全体を読むこと」と指示し、作品原文のプリントは1週間前に配るようになっている。評価方法は、学修態度や提出物60%、期末の筆記試験40%とし、学生は期末の筆記試験に向けて、作家名・作品名を覚えたり、15点の小説からなるリーディング・リストのうち2作品以上を読んだりすることになっている。この15点の小説はよく知られた作品で、興味深い点があり、内容の多様性があるようにと選んだつもりだが、もちろん恣意的なリストである。シラバス末尾には受講生へのメッセージとして、「英語文学のさまざまな作品を読んでいくための土台を築く授業にしたいと思います」と書いた。他の2年次科目や3年次科目につなげるのが理想ではあるが、逆に土台を崩してしまっているかもしれない。

悩み

さて、このような授業の中で何に悩むかということ、「面白くてためになる」授業をしたいと思っているのに、駆け足で表層的に進むだけでどちらも達成できていないのではないかという点である。到達目標では「基本的な知識と理解を得る」としているが、代表的な作家名・作品名を覚えさせることに意味はあるか、そしてそもそも膨大な量の英語文学に関して、伝えきれないことが多いという思いもある。

他方でこれらの悩みを裏返してみると、面白さについては、学びとは必ずしも面白くなくてもよいかもしれず、楽しくなくてもためになることもあるだろう。その「ためになる」とはどういうことかも問題だ。以前学生による授業アンケートのコメントで、「確かに英語文学の知識は増えたが、ためになった気はしない」というものがあり、そうかもしれないが何をもって「ため」と言えるのか、考えさせられた。今は役に立たないように思えても、たとえば作品を読んだ経験などが将来の糧になるなら喜ばしい。暗記については、インターネットで調べれば大抵のことがわかる時代だが、だからこそ自分の中に確かな知識を持ってほしいとも思う。英語文学の全てを伝えきれないのは当たり前で、一部でも何もないよりはいいのではないか。

自分ではどちらかという現状の「英語文学Ⅰ」という科目は詰め込みすぎのような気がしているが、生半可ならしない方がましということであれば、もっと広くまたは深く学ばせる方法を探るべきなのかもしれない。その際にはまず私自身が広く深く学ぶ必要がある——というのが、うすうす感じていたけれど直視しないようにしていた、自分にとって痛い結論である。実はこの授業が味気なくなってしまう原因の1つとして、自分の専門領域や関心が、児童文学、ファンタジー、SFなど、文学史の主流から少し外れることもあるかもしれないと考えている。授業で扱うどの作品にも興味深い点があるので、それを伝えられるよう、各作品のファンのつもりで語るよう心がけてはいるのだが。

最後に参考までに、3年次の選択必修科目「英語文学特殊研究Ⅱ」の概要を述べておく。これは学生の発表を中心に1つの作品を半期かけて読んでいく授業で、クラスの人数は30～40名程度である。今年度とりあげるロアルド・ダールの『チョコレート工場の秘密』のように、私は大抵、学生たちも映画等で親しんでいるようなファンタジー系の児童文学作品を選ぶ。こちらの授業では「英語文学Ⅰ」で抱えているような悩みを感じることはないので、「一般的包括的科目」には特殊なところがあるだろう。

妙な比喩を持ち出して恐縮だが、私にとって「英語文学Ⅰ」という科目を教えることは、英語文学を見渡せる地図を描いて、ところどころ作品紹介の（浅い）穴を掘る仕事のイメージである。もし教職課程の科目でなかったとしたらどうかと考えてみたが、掘る穴の場所や深さは少し変わるかもしれないものの、文学史を扱う入門科目ということ意識して、私が「英語で書かれた文学について重要」と思っている事項を網羅した、同じように官僚的な授業を展開するだろうと思う。それ以外の方法があればぜひ学びたいものである。

本シンポジウムでは他の登壇者の授業の工夫や、聴衆の質問・コメントから大きな刺激を受けた。特に「一般的包括的科目」といえども、自分の専門領域をもう少し生かして授業を展開する道もあるかもしれないと気づかされた。「文学史」や作品読解が固定されたものではないことを念頭に、引き続き悩んでいきたい。